



【感染症だより】

～溶連菌感染症について～

昨年から引き続き、溶連菌感染症の流行が持続しています。一般的に溶連菌というと、A群溶血性連鎖球菌のことを指します。これは幼児期～学童期に流行する細菌感染症です。新生児期に産道から感染するGBS (Group B *Streptococcus*) というB群溶血性連鎖球菌 (*Streptococcus agalactiae*) も溶連菌の一種ですが、ここでは、一般に流行するA群β溶連菌 (GAS : group A *Streptococcus* 一般的に *Streptococcus pyogenes* のこと) について説明します。

GASは飛沫・接触により感染が広がります。発症すると咽頭炎や扁桃炎、とびひ、蜂巣炎をおこします。また、中耳炎、肺炎、関節炎、骨髄炎、髄膜炎を起こすこともあります。かつて猩紅熱と言われた病気もGAS感染によるものです。GAS感染症には必ず抗生剤治療を行い、除菌を行います。なぜ他の風邪と違って除菌をするのかというと、GAS感染によりさまざまな合併症を引き起こすことがあるからです。治って10-20日後にリウマチ熱や急性腎炎を発症することがあります。なぜ10-20日後になるかというと、溶連菌に罹患することによって体の中に出る特有の免疫物質が体の各所で炎症を起こすためです。関節炎や心膜炎を起こせばリウマチ熱という診断になります。3歳未満ではこれらの合併症を起こすことはまずありませんが、3歳以上のお子様には合併症がみられることがありますので、しっかりと除菌をしましょう。発病から9日以内に抗生物質を開始することで、合併症をかなり防ぐことが出来ます。

除菌に使用する抗生物質は、ペニシリン系 (ワイドシリン、パルシリンなど) の10日間内服が第一選択薬として使われますが、ペニシリンアレルギーの方にはセフェム系 (メロキシム、セフトリオンなど) 7日間、マクロライド系 (クラリス7日間、ジスリッド3日間など) が用いられます。頻回に再発する方や、治療抵抗性の方には、より効果のある抗生剤を選択して除菌を行います。また、家庭内に保菌者がいる場合には繰り返し罹患することがあります。そのような場合には、家族全員の除菌が必要になることがあります。

抗生物質治療開始後24時間経過し、全身状態が良くなっていれば登園・登校が可能です。

表：4月しみず小児科・内科クリニックで検出された流行性の感染症

	感染症	患者数
1	胃腸炎	43
2	インフルエンザ B	16
3	おたふくかぜ	11
4	溶連菌	8
5	アデノウイルス	1

文責： 清水マリ子

